

《そうめんとすいか》に寄せる

郡司ペギオ幸夫

この画題を永らく、「すいかそうめん」と聞かされてきたが、本当は「すいかとそうめん」らしい。本当の、というのは、新宿かどこかの蕎麦屋で、確かに、「すいかとそうめん」という名で、シヨ－ウィンドウに飾られていたらしいのだ。すいかそうめんではなく、すいかとそうめん。それなら納得である。

すいかそうめんとなると、これはもうどう足掻いても一個の完成された料理として提供されているとの主張を免れない。すいかは、そうめんの中にしばしば浮いている缶詰のみかんやさくらんぼの変種であり、冷麺に添えてあるすいかやなしと同じ役割を果たす。すいかそうめんーふうん、そうですか。すいかそうめんと言われた時点で思考停止し、それをどうのうに食すのか、など想像する気にもならない。なんだかわからないが、あるのだろう、というわけだ。

ところが、すいかとそうめんといったとき、すいかとそうめんの間にある」と「が決して融合もせず関係化もしないすいかとそうめんを、無限のかたに隔てさせる。トムとジェリー、ぐりとぐら、ニワトリと卵……。対立関係、仲間関係、因果関係と、関係付けられた二者は、二つの接続に途端に意味をもたせる。対して、すいかとそうめんは、徹底して無関係でありながら、ただ無意味に接続するのである。

すいかとそうめんといわれたとき、すいかを片手にそうめんをすすらねばならぬのかという不安がよぎる。そんなこと、強制されるはずもないのに。それは、そうめんを食べてからすいかを食べるとか、すいかを口直しに、そうめんをすするとかーという食べ方ではなく、テレビを見ながらご飯を食べるかのよう(そういえば、ジャ－ムッシュのフィルム、ストレンジャー・ザン・パラダイスでは、これをテレビディナーと呼んでいた)、すいかを食べながらそうめんをすすらなくてはならないのである。

そうめんとすいかの出会いだろうか。いやそんなものはない。器のなかでの一期一会。いや、そんなものはない。

すいかとそうめんは、器の中で接しながら、出会ってなどいない。動物園のシロクマは、自らに憧れをもって見る子供と出会ってなどいない。ガラス越しに、水面近くに並ぶ子供の頭を、水面から頭を出すアザラシと思って襲い掛かる。シロクマと子供は、ガラス越しに接しながら、出会ってなどいない。すいかとそうめんは、これと同じく、出会ってなどいないのである。

だからこそ、「すいかとそうめん」は、或る種の禍々しさをもって我々に迫り、何か、世界とは接続であるとの哲学を体感させてくれるような、逆に神々しささえ纏った風情で、我々に迫ってくるのである。この画は、すいかそうめんではなく、まさにすいかとそうめんを描いたものだ。凜とした高ぶりを身に纏いながらも、下品な風情を持ち、無関係なものの接続が発する、奇妙な緊張感とユーモアを漂わせている。それは、作家自身の、世界に対する無関係性を表出したものなのかもしれない。

